

チャレンジ目標

- 進んで明るいあいさつ 20人
- みんななかよく やさしいことばを20回
- 不登校0 いじめ0 のあたたかい学校

10月28日(木)の人権参観日に大勢の参観をいただきありがとうございました。同時に開かれました人権講演会には四十数名の参加をいただきました。講師の霜川正幸先生のお話が大変示唆に富むものでした。先生の熱い思いは十分に伝わりませんが、講演内容の概略をお伝えしたいと思います。

「心」豊かな三井の子どもを育てる

山口大学教育学部准教授 霜川正幸先生

うずくまっている老人を眺めながら、子どもの手を引いて立ち去る親子。一方で立ち往生しているシルバーカーの老人に小走りに近づいて助ける親子。この行動の差がすなわち人権感覚の差。言動に差のある大人を見続ければ、当然子どもの言動にも差が出てくる。自然に人権感覚の乏しい子どもを生み出す。とまず説かれました。



次に私たち人間は人を攻撃(いじめ)する構図として4つあると指摘され、それぞれの対処のしかたについて語られました。

① 他人が他人を攻撃(いじめ)する構図

このときは、攻撃するのも、されるのも、自分ではないので、関係ないと考え、その攻撃を止めようとはしない。傍観者の立場です。しかし、このままでは攻撃は終わらない。だれであろうと攻撃は許さないという正義の心を育てる必要がある。それを育てるのは、大人がその範を示すことが肝要。

② 他人が自分を攻撃(いじめ)する構図

最近の子はこの攻撃に負ける。あるいは攻撃がすぎるまで待つ。そのために、心が萎える。これに負けないよう、攻撃をはね返す力をつけることが大切。それには多くの知識を得るために学ぶ。多くの知識があれば、正しく判断できる。また情報を整理し、的確に判断する訓練を重ねることが大切。

③ 自分が他人を攻撃(いじめ)する構図

自分の思いは主張できても、相手の心情を推測できないために、攻撃していることを理解できていない。このようにならないためにはこれをしたらどうなるかを見極める力が必要となる。その力をつけるためには、自らを振り返る内省をする訓練を積む。毎日今日はどうであったかと親子で話し合うこと場づくりにもなる。

④ 自分が自分を攻撃(いじめ)する構図

これは自尊感情・自己肯定感が低下し、生きる意欲が低下する。これを防ぐには、大人は悪いところのみを指摘したり励ましたりするのではなく、個々のよさを見つけ、それを認める力が必要。

4つの構図に対するそれぞれの対応はなかなかできそうにないと思われるかもしれませんが、しかし、基本は子どもをありのままに認め、大人がしっかり包み込むこと。子どもにできる気持ち、できる気分させるのです。慈しむことで子どもは育つということなのです。それだけ子どもたちを私たち大人は見ているのでしょうか。とても考えさせられました。

その愛情をもちつつ、子どもに次の五つの体験をさせてほしいと言われました。

一 自然体験

自然の中にぼつんといること、人間の無力さと同時に、人のあたたかさ、強さをいっぱい感じることができる。

二 生活体験

実生活の体験経験は場の状況や互いの関係性を感じ取ることが多く、人間関係づくりもうまくなる。

三 我慢体験

待つことができる、耐えることができることは人間関係を円滑にする上で必要な要素である。

四 内省体験

自らを振り返る体験が多いほど、人に優しく接することができる。また自分のよさを確かめることもできる。

五 感動体験

心が動くと共感できる。あこがれる。夢をもてる。やってみたいという意欲も生まれる。

自らを高めつつ、共生できる社会づくりのために、この5つの体験を積んでいく努力を大人はしていく必要があるでしょう。

ユーモアを交えつつ、様々な問題を抱えた子どもたちと向きあった実体験からのお話しには、説得力があり、深く考えさせられる講演でした。

最後に先生がアメリカで体験されたエピソードを一つ付け加えておきます。

先生がホームステイしていた家の男の子がある日いじめられ、泥だらけになって家に帰ってきた。それを見た両親は慰めるどころか、烈火のごとくその子を怒り、延々と説教を始めたそうです。「なぜ、やられて黙っていたか、なぜ反撃しなかったのか、なぜ大声を上げて助けを求めなかったのか、なぜ警察に行って訴えなかったのか、」等々と。その後夕食の準備のために母親は席をたった。しばらく



くすると、父親があたたかく子どもの肩を包み込みながら、やさしく語りかけたそうです。「今君はひとりだ。自分を守るのは自分しかない。しかし、将来君は恋人をもつだろう。子どもも持つに違いない。その時君は家族を守らなくてはならない。たったひとりの自分を守れない君。その君が愛する家族を守ることができるだろうか。だから今、君は自分を守るためにどうしたらよいか考えてほしいのだ。」

厳しくしかもあたたかい。これだけ、真剣にそして愛情豊かに子どもに向きあう大人にならなければと、思いを新たにしました。